

【研究ノート】

福祉心理学試論 I

豊村和真

研究ノート

福祉心理学試論 I

豊村 和真

Kazuma TOYOMURA

目次

1. はじめに
2. 北村晴朗「福祉心理論」
3. 竹内要「『環境障害』とその発達初期における2, 3の事実について—福祉心理学の視点—」
4. 黒田正典「福祉心理学の成立」
5. 考察

〔要旨〕

現状では、福祉心理学では、その目的、対象、方法論などが定まっているとは言いがたい。そこで、福祉心理学という学問の歴史において最も初期に書かれたと思われる論文がどのように福祉心理学の構築しようとしていたのかを示す。それにより、今後の福祉心理学の方向性について考えてみようとした。本稿は、前半の部分についてまとめたものである。

1. はじめに

福祉心理学の黎明期の論文は現在ではなかなか手に入れにくい状態であり、福祉心理学がどのように形成されていったのかは、必ずしも定かではない。そもそも現在でもその目的、対象、方法論等すら合意されているとは言えないのではないだろうか。1993年に出版された「現代福祉学レキシコン」においては福祉心理学（welfare psychology）の項では、「福祉心理学という概念は一般的にはない」（白石大介）と記されている。1999年発行の有斐閣心理学辞典にも、2013年発行のVandenBosh監修APA心理学大事典においても福祉心理学という見出しはない。

2003年に第一回大会が開催された日本福

祉心理学会の機関誌第一巻は「福祉心理学の構築に向けて」という特集を組んでおり、そのなかで、定義、成立過程、提言などが語られている（ことになっている）が、実際にはやはり歴史的な視点はほぼ書かれていないに等しい。そこで福祉心理学について、まず、福祉心理学初期の論文を取り上げ、福祉心理学についての考えかたをまとめて後に、思うところを書いてみようと思う。小稿は前半部について書くことにする。後半は稿を改め、試論、あるいは私論として述べることにする。

一般的に認知されているかどうかはひとまずおいて、福祉心理学はいつ頃成立したといえるのであろうか。

本邦において初期に出版された「福祉心理

キーワード：福祉心理学 歴史 概念

学入門」(岡田, 1995), 「福祉心理学」(佐藤・山根, 1998) のいずれも, 歴史的経緯については書かれていない。

題名には書かれてはいないが, 戸川 (1971) 第一章「臨床心理学の独立—その研究態度と研究目的について」において, 「臨床心理学の研究態度, 研究目的という点についていえば, 臨床心理学を『福祉心理学』として規定することによって, その目的や研究態度を明白にすることができるかと思う」と述べられている。このように同論文では, 福祉心理学を自明のものとして, いわば「連字符心理学」のように扱われているが, それがどのような学問なのかについては触れられていない。

題名にはっきりと「福祉心理学」と書かれた書籍には, 1983年刊行の「児童福祉心理学」(箕原, 1983) がある。そこでもやはり同様に触れられてはいない。

論文では, 黒田 (1984) から初期の様子が見えてくる。多少長くなるが一節を引用する。

「ところで福祉心理学の語も心の福祉の語も新しいものである。福祉心理学は, 英語でいえばさしずめ“psychology of welfare”であろうが, Psychological Abstractsにもこの題目を発見できない。国内で福祉心理学の概念をとりあげた論文としては, 竹内要 (1974, 1976¹⁾, 1983), 北村晴朗 (1979) のものがある。大学における講義としては, 東北福祉大学社会福祉学部において1975年から北村晴朗教授が『福祉心理学概論』を, 1976年から塚田毅教授が同大学院で『福祉心理学特論』を開講した²⁾。そのほかには国内の大学の科目または講義題目として福祉心理学の語は現れてはいない。また本学の福祉心理学科以外に福祉心理学の名を冠する学科, ないし講座もやはり見当たらない。」(p.485)

ここで述べられている竹内 (1974), およ

び竹内ら (1976) (と藤田ら (1976), 注1) 参照) は, いずれも日本生活心理学会のそれぞれ第15回, 第17回の発表要録であり, それほど詳細には語られておらず, 後の竹内 (1983) でまとめられている。従って, 黎明期のまとまった論述としては, 北村 (1979), 竹内 (1983), 黒田 (1984) の3論文であり, 先の黒田 (1984) の記述からは, これらの時期以前に「福祉心理学」と明示され, 詳述されたことはなかったように思われる³⁾。そこでこれら三論文を順に紹介しつつ, 若干の説明を加えていくことにする。その際なるべく, 原著の表現を忠実に示し, その後の進展について解題風に書いていくことにする。従って以降は, 「」内は文中にある場合は, それぞれの論文の表現引用である。筆者の特記すべき記述については { } でくくって示す。

2. 北村晴朗「福祉心理論」

北村晴朗は, 1979年に「転換期の社会福祉論」第7章「福祉心理論」の中で, 福祉心理学について詳述している。

北村 (1979) は, 本文内では「福祉心理学」と記述しているが, 表題は「福祉心理論」である。このことから福祉心理学という語が1970年代には膾炙されていなかったことがうかがえる⁴⁾。しかしこの第一節が「福祉心理学とは何か—課題と方法」となっており, ここでは福祉心理学について以下のように述べ, その後の福祉心理学の概念をある程度規定したように思われる。

「人間は決して手段ではなく, 目的そのものであり, それぞれ至上の価値と尊厳をもつものなので, 心理学も当然人間の尊厳と福祉の増進と無縁ではない。この意味で, 心理学にたずさわる者には倫理的配慮が要求されるが, その顕著な例はアメリカ心理学会が制

定した心理学者の一九条の倫理綱要であろう。その前文には、心理学を職とする者は、個々の人間の尊厳と価値を信じ人間が自分と他の人々の理解を増進させることを仕事とするが、その際、その援助を求める人々の福祉を守らなければならないことが強調されている。さらに応用心理学になると、それは本来的に、社会的貢献や福祉の増進を目的とするものである。したがって、心理学はすべてその本質上、人間の福祉を守りこれを増進させることを最後の目的にするものであるので、とくに福祉の擁護と増進を眼目とする福祉心理学が独立の分科として成立することは当然のことであり、その必然性は心理学自体のなかにはじめから存在するものといえるのである。」(pp.152-153)

この考え方は、要約すると「心理学の最終的目的は人々の福祉＝幸福である」とする考え方になるが、後に岡田(1995)「福祉心理学」で記された考え方につながり、ひいては本学、北星学園大学福祉心理学科の考え方にもつながっている。

さらに、この福祉あるいは幸福の状態を、各種環境の中にいる人が、その環境に対する適応の程度の問題と捉えている。望ましい環境について考慮し、それへの適応の失敗の解消方略を検討することが福祉心理学の課題であるとし、各種心理学およびその周辺科学の援用が重要と述べている。なおこの環境における「不適切」な状態に強く着目したのが竹内(1983)である(次節でこの内容について詳述する)。

第二節は「望ましい人間像—精神的健康・健康な人格」とし、1946年WHOの定義「健康とは肉体的精神的ならびに社会的な、完全に良好な存在状態であって、たんに病気や虚弱がないということではない」をあげ、福祉あるいは幸福の基本的条件の一つとしている。これには、オールポートの成熟し

た人格の6つの指標をあげつつ、エリクソン(Erikson, E.)の8つの発達段階の各々の人格について言及し、その全体を含むのが成人の健康な人格であるとしている。

第三節は「望ましい環境」である。環境の重要性について述べている。環境を自然的環境と社会的環境とさらに文化的環境とに大別し、福祉心理学はそれが人間の心理に及ぼす影響を明らかにしなければならないとする。

気候変動、大気・水質汚染、風水害のような最近我が国を苦しめている環境の変化の重要性について解いているのである。

以下本項では「」内は北村(1979)の語をそのまま引用している。

1)「WHOの規定するような健康の規定に照らして、望ましい自然環境の諸条件を明らかにすること」。2)社会的環境が人間の行動や意識またその形成に及ぼす影響については、社会心理学、発達心理学、人格心理学また臨床心理学などの諸領域において、多くの資料が得られている」が、「そうした知識に比較して、家庭をはじめとして個々の人間集団における望ましいあり方を形成してゆくための教育や訓練が組織的には全く行われていない」という点を改善する必要性について説いている。3)「文化的環境には文物という具体的な事物と文化規準の二つがある」とし、文物については「人に本当の『健康』をもたらす、健康の保持や回復に役立つものが、文化規準としては、人間の全体的傾向の実現、個人的には個性の発展に資するようなものが、望ましい」と述べている。

第四節「望ましい生き方」では、次の3つの考え方をのべている。

1 生活上の主要な環境に対してよい適応の状態にあること

適応状態がよいというときには、内的適応も外的適応という二側面があることに注意すべきである。内的適応とは「本人が自分の欲求を満足させ、幸福感をもつこと」を意味す

る。外的適応とは、「人の環境に対する関係が環境側の要請や条件に適合していること、社会的環境への適応でいえば本人が社会の要求・期待によく応えていること、社会的効果をもつ対応をしていること」を意味する。問題は、この二つの適応が両立しない場合も稀ではないことであるとする。その具体例として、「対外的な適応とか職場の生活には申し分のない成績をあげながら、内的には神経症的な状態にある場合もあれば、社会的には非難されたり他に迷惑を及ぼしたりしながら、本人は幸福感に満足している場合もある」という例を挙げている。

続けて北村(1979)は、「しかし、さきに挙げたWHOの「健康」の規定や、さらに成熟した人格、精神的健康などの指標に照らしあわせて、環境への外的適応が人の望ましい姿を助成するという形で内的適応の良好さを伴っていれば、それは良好な適応ということは可能であると思われる」と述べている。

2 適応概念

「人間の生産性、創造性の側面に中心をおいて人間の生き方を考える必要があることは明らかである」とし、フロム(生産的構えの強調)、ゴールドシュタインやマズローの自己実現の欲求の重視などを引いている。

そして「どんな人間の生き方が人間の福祉からいって最も大切なものかを、自分自身の生き方の探求として体得してゆくという学問のあり方は、福祉の実現のための方途として本質的な重要性をもつ」とし、「『わが心の心理学』として再建設されるべきもの」としている。

3 育成・指導・援助

「望ましい生き方がめいめいの人に可能になるように、後進の人びとを育成し、指導し、さらに援助することと、さらに広く援助を必要とする人びとに対して援助を与えること」が重要であるとしている。そして、「さまざまな事由によって他の援助を必要とする障害

者や身心機能の薄弱な者に援助を与え、力を借そうとする傾向もまた人間のあるべき姿、望ましい生き方として挙げられるべきであろう」。さらに「たとえば施設に入っている老人でも病人でも、可能な限り精神的な健康さをもち、社会的に良好な状態にあり、自己実現的・生産的の営みを行い、さらに多少でも他に援助を与える生き方を為すことが、本人の福祉のために必要である」としている。

人間の生き方の望ましい姿が以上のようなところに重点があるとすれば、その姿の実現がはばまれるときには、広い意味のフラストレーションの結果として、さまざまな異常反応が現われてくる。これらの解消もまた重要である。

第五節は「人間援助の心理学」となっている。

カウンセラーのように、自助の精神をもって援助をすること、あらゆる人間の援助は、本来援助を受ける人が「自主的に選んだ方向において成長できるようにする過程」であり、自分の力による目的の達成、あるいは自助(Self-help)を助けることなのである。望ましい適応という点からみれば、その達成を助けることであり、自己実現や生産的生活という点からみれば、本人の自己実現や生産的活動を促進する援助であり、リハビリテーションに焦点をおいていえば、本人が自立の意欲を起し、自ら機能訓練などに当たるのを助けることである。

また、人間援助にあたっている人びとの精神的健康のための心理的援助の必要性についても説いている。このことが戸川のいう「臨床心理学の研究態度、研究目的という点についていえば、臨床心理学を『福祉心理学』として規定するということの意味であろうか。

以上のように最も初期に書かれた論文として、かなり全方位的な説明になっており、以後の論文で語られる内容は、北村(1979)

の定めた枠を越えにくいものになっている。

3. 竹内要「『環境障害』とその発達初期における2, 3の事実について—福祉心理学の視点—」

竹内要の「『環境障害』とその発達初期における2, 3の事実について—福祉心理学の視点—」はそれ以前に発表されたものを再構成し、1983年に詳細に論じたものである。

竹内（1983）では以下のように語られる。

「すべての人間が、一人ひとりよりよく成長しよりよく生きていくために、まずその人間を理解し、その発達のためのニーズに的確に応じ、適切な援助を目指すのが福祉心理学である（竹内、1974）。それは、人間の全生涯にわたり、それぞれの人間に対し適切な環境をしつらえることである。しかし、われわれの日常生活の現実、個々の人間にとっての環境そのものが著しく不適切で、人間の福祉を損なうような状況も少なくない。この人間を損なったり成長発達を阻害する環境の状態を『環境障害』（竹内ら、1976）と名づける。」（p.42）

このように2つの学会発表で提示した考えを再度提起し、福祉心理学について語った⁴⁾。竹内（1974）では、他の心理学と異なる福祉心理学の特質がわかりにくかったが、竹内ら（1976）及び藤田ら（1976）でテクニカルタームとして「環境障害」を示した。そして竹内（1983）でこの環境障害について、家庭環境障害、学校環境障害、その他（地域社会環境障害、職場環境障害など）3つに分類し、節を改めて発達段階別に論じている。

まず、竹内（1983）は、障害の意味するところは「普通、子どもの障害ということで考える場合、障害の起因をどこに求められるかということから、子どもの障害、欠損部位に焦点をあてて規定している」としている。

しかしながら、「子どもの障害や発達の偏倚の起因が一次的には個体の外側に見出される場合」があり、野生児やホスピタリズムの例をひいている。そして、「ここにおいて障害ということ（事態）は、ある個人とその人をとりまく環境との関係において生ずるものであると考えるのが解決法として建設的である」とした⁶⁾。

このことを黒田（1984）は、「竹内の福祉心理学の構想は、一般社会福祉の発達の方向、すなわち個人主題から環境配慮へ、限定的福祉から普遍的福祉へ、経済的援助から心理的援助への進行と一致しているように考えられる」と述べている。

しかしながら、竹内（1983）の環境障害についての特性記述については、むしろ後には児童について述べた竹内（1988）での表現の方が簡潔でわかりやすいかもしれない。竹内（1988）では「成長発達を阻害する環境の状態を『環境障害』と名づけて考察した。この環境障害は、一人ひとりの児童にとって発達阻害する要因であり、そのマイナス面を指摘することによって、福祉の実践的課題と方法を明確にしようとしたものであった。それは、人間の福祉的状况を守るという意味において防衛的な面あるいは消極的な分野ということもできる」（p.44）と、また、児童に関して「子どもの発達、人格形成の意義からみた教育的立場と、広く子どもの生活全般を対象とする社会的立場に示唆されるものがある。すなわち、子どもを主体にして、この両者を包含し、統合していくのが福祉心理学の立場である」（p.46）と語っている。

4. 黒田正典「福祉心理学の成立」

黒田は1984年の「東北福祉大学創立25周年記念論文集」において、「福祉心理学の成立」という論文を示した。なかなか福祉心理学が

成立しなかった理由として、そこでは、先の竹内論文や北村論文をも解題しつつ、それらでは触れられていない視点についても多くを語っている。

「心理学は自然科学をモデルとして科学としての自立を急いでおり、いわゆる『心のない心理学』(Psychologie ohne Seele)への一途をたどり、人間というものはおろか、心も感覚・感情等に解体され、果ては意識そのものが追放され『行動』の概念に置き換えられていったのである。この成り行きに対する心理学者の反省・批判もなかったわけではなく、心理学界における有力な動向として、1960年ごろから人間性心理学が台頭した。今後はこの流れにもそって、福祉心理学は発展してゆくと考えられる」(p.487)としている。

また、「社会福祉そのものは、理屈よりも実践や社会運動を生命とし、またそれは思想と法をその成立の現実的条件とする。したがって社会福祉の研究といえば、思想と法を対象とせざるをえないことを特徴とするといつてよいであろう。これは心理学の伝統的な性格にはなじまないことであった。心理学はまず客観的法制を追求し、次にその応用として実践的問題をとりあげる。また研究に際してまずとりあげるものは、いわゆる実証的データであり、考察はこのデータを著しく離れることを嫌う。したがって研究テーマは、社会福祉の観点からすればどうしても微視的にならざるをえない。このような事情から心理学は社会福祉そのものを主題とすることは少なかったのである」(pp.489-490)と述べ、さらに、現時点「1984年であろうか」で既に福祉心理学は成立しているが、「それはどのような意味と論理であるかはまだ明瞭ではない」としている。

この点を明らかにするためにかなり長文になるが、誤解をさけるためそのまま引用する。

「まず福祉心理学の成立ということには、二つの形が考えられる。

その1 福祉心理学は、一つの応用心理学であって、社会福祉の実際に必要な知識と技術の集合である。

その2 福祉心理学は、心理学における独立の一分野であって、独自の原理によって組織されているところの、社会福祉の実際に必要な知識と技術の体系である。

この二つの形の対立は福祉心理学に限ったことでなく、たとえば教育心理学についても同じ問題がある。その1は教育上の多少、便宜的な取扱いともいえる。この形をとるほうが容易でもあるが、北村論文を検討すると、それではすまされない理論的問題がある。それは社会福祉における「心の満足」および「幸福」の位置づけの問題である。同論文はまた「幸福感」ともいう。この後の考察の便宜のため、これらの類似する語を一括して扱い、これらの達成への努力を「心の福祉」とよぶことにする。3語のニュアンスの差よりも「社会福祉」の語との対照的な関係のほうが今は重要である。そこで以下のような問題が続出してくる。

- (1) まず心の福祉は社会福祉とは別のものであるか。たとえば宗教的福祉として別個なのであるか。
- (2) それとも心の福祉は社会福祉の一部なのであるか。もしこれを認めるとすると、さらに問題が出てくる。
- (3) 社会福祉の中に心の福祉が含まれるとすれば、社会福祉の中に心の福祉でない福祉が含まれることになる。これをかりに-Aと表わしておくと、心の福祉と-Aはどのように関係するのか。両者は横に並ぶのか。それとも下部構造と上部構造の関係になるのであるか。もし后者であるとすると、また新たな問題が出てくる。
- (4) -Aを基礎的な社会福祉とよんでおくと、基礎的な社会福祉ができあがれば、心の福

祉はおのずから流れ出てくるのであるか。
(5) それとも基礎的な社会福祉ができあがっても心の福祉は自動的に発生してくるのではなく、心の福祉を作るのには別個の努力を必要とするのか。」(pp.493-494)

即ち、黒田(1984)は北村(1979)の「幸福」、「心の満足」、さらに「幸福感」をひとくくりにした「心の福祉」を仮想する。そして、「心の福祉」と従来の「社会福祉」との関連性について考察する。すなわち、この二者が別物なのか、前者は後者の一部なのか、また仮に一部とすると、「心の福祉」は「社会福祉」における「心の福祉」の補集合(論文では「-A」と表記され、「基礎的な社会福祉」としている)との関連性が何かを問うている。さらに、ここから黒田(1984)のユニークなところであるが、{おそらくは「心の福祉」は「社会福祉」に含まれると考えて}、「基礎的な社会福祉」の形成が自動的に「心の福祉」を形成するのか、それとも「別個の努力」を必要とするのかを考察している。

さらに、これらの関係を層理論でとらえようとしている。層理論は、心理学においては「人格を異質の層の積み重なりと考える立場または研究領域」とされ、黒田(1984)ではHartmann(1940)の理論を下敷きにして説明を試みている。ちなみに、Hartmannは、実在世界は四層構造(無生物的存在層、有機的存在層、心的なもの、精神的な存在層)からなり、これらの層間を支配する各種法則があると看做する。その中でも範疇的依存法則は四つの層法則があり、黒田(1984)はその中に含まれる「強さの法則」と「自由の法則」が、「心の福祉」と「基礎的な社会福祉」の関連性を考察するのに重要であるとしている。

これらの法則について簡単に述べると、前者は「存在という点については、低層が高層より強い、と主張するものと解せられる」(黒田, 1984)。後者は、高層は存在という点で

は低層に依存するものの、いったんその存在が確保されれば、その上にどのような新しい要因を加えるか、どんな構造を作るかは、自由である」(黒田, 1984)とするものである。蛇足であるが、層構造が出来上がった状態では、上部構造は下部構造なしでは存在し得ないのであるが、上部構造はそれ自体の独自の構造と法則を持ち得るということである⁷⁾。

「基礎的な社会福祉」を低層(下部構造)に、「心の福祉」を高層(上部構造)と考えると、「基礎的な社会福祉」は土台なのであるから、強さの法則に従って、その上に「心の福祉」などが存在しなくとも社会福祉自体は存在しうることになる。

一方、上部構造は下部構造からは自由なのであるから、上にある「心の福祉」は下部構造の指図を受けない、即ち、下部構造によっては決定されはしないことになる。

黒田(1984)では、これに関するより厳密な説明を避けて、教授学という範例⁸⁾を4つ提示し、理解を容易にしている。例えば、第一の範例は「絵の具の青と黄を混ぜれば緑になる」というような混色の法則は因果法則であるが、絵画そのものを因果的に決定することはできない。混色の法則は、絵画の成立に対して単に一部の条件にすぎず、絵画成立の全条件についてはあずかり知らぬことである。絵画は、絵の具の混色の法則が基礎になり、そこに画家の活動が加わって、始めて成立する。」(p.500)である。「強さの法則」と「自由の法則」の優れた例示である。

最後に福祉心理学の内容については、「福祉心理学は、心の福祉に関する理論と奉仕の心理学を重要な支柱として、これに竹内・北村・塚田諸教授が提出してきた諸基本概念を配置して、体系を構成するの望ましいと思われる」として、説明を終えている。

5. 考 察

以上記したように、三論文は先達がほとんどない状態での記述されたものであり、やむを得ないことであるが、各論文において福祉心理学の定義もしくは性質について多様な表現で語られていた。またいささか抽象度が高いため、具体的には何をさすのかが必ずしも明確ではないこともあった。

しかしながら、北村論文は幸福と心の満足を、竹内論文は環境障害の性質とその克服を、黒田論文は層理論により福祉心理の独立化を、最も述べたかったのではないかと推察される。

それらの論文についてレトロスペクティブな視点であるという利点をもって浅学の身でありながら解説を試みたのが小論である。

これら福祉心理学黎明期の主要3論文の成果を踏まえて福祉心理学のありようについて語るのには次の機会にする。

ただこれだけは言っておきたい。福祉心理学の基本的理念であると思われる「心の福祉」は、下部構造である「基礎的な社会福祉」から独自の構造と法則を有するとした黒田(1984)の考えが妥当ならば「福祉心理学」は下部構造である「基礎的な心理学」からも独自の構造と法則を有するという考え方もまた妥当であることになるのではないか。

〔注〕

- 1) 正確には竹内ら(1976)と藤田ら(1976)の2本の連名発表である。
- 2) 諸先生は既に鬼籍に入られ(黒田正典先生2010年没、北村晴朗先生2005年没、塚田毅先生2001年没)、講義録は出版されていないので、入手できなかった。
- 3) めばしいデータベースを利用して文献検索を行っていても発見できなかった。
- 4) 社会福祉学の領域では××学より××論の表記の方がなじみがあるようである。
- 5) 従って、語としての「福祉心理学」を(連字符心理学的ではなく)使用したと言えるのは

竹内が最初のものである。

- 6) WHOの国際障害分類(ICIDH, 1980年採択)の批判・検討から国際生活機能分類(ICF)へ移行があった(2001年採択)。ICIDH批判の重要な要因として、環境因子が明示されていないこと等があげられているが、竹内の発表とほぼ同時期であるか、あるいはやや竹内のほうが早い。
- 7) このような構造と法則は、例えば物理的工学的なものでも当てはまると思われる。例えばTCP/IPのようなネットワーク階層モデルでは、最下層のネットワークインターフェース層が最上位のアプリケーション層の基盤となるが、最上位層の振る舞いは最下層(OSI参照モデルでは物理層)に障害があれば通信はできない。しかし、その最下層の性質にはアプリケーション層は影響を受けない。アプリケーション層で何ができるかは、その層独自のプロトコルにより決まる。
- 8) これは数学で言う理論とモデルの関係か。

〔参考文献〕

福祉心理学研究(2004)第1巻, 日本福祉心理学会

〔引用文献〕

- 藤田敏彦, 竹内要, 高見沢美保, 1976, 福祉心理学実績の視点一環境障害Ⅱ一, 日本生活心理学会第17回研究発表要録, pp.15-17
- Hartmann, N., Der Aufbau der realen Welt: Grundriss der allgemeinen Kategorienlehre, Berlin, 1940.
- 北村晴朗, 1979, 福祉心理論, 転換期の社会福祉論 第7章
- 黒田正典, 1984, 福祉心理学の成立, 東北福祉大学創立25周年記念論文集, pp.485-507
- 中島義明他(編), 1999, 心理学辞典, 有斐閣
- 岡田明, 1995, 福祉心理学入門, 学芸図書
- 佐藤泰正・山根律子編, 1998, 福祉心理学, 学芸図書
- 箕原實, 1983, 児童福祉心理学, 洋々社
- 竹内要, 1974, 福祉心理学試論, 日本生活心理学会第15回研究発表要録, pp.35-39
- 竹内要, 藤田敏彦, 高見沢美保, 1976, 福祉心理学実践の視点一環境障害Ⅰ一, 日本生活心理学会第17回研究発表要録, pp.11-14

竹内要, 1983, 「環境障害」とその発達初期における2, 3の事実について: 福祉心理学の視点, 上田女子短期大学児童文化研究所紀要, pp.42-56

竹内要, 1988, 児童文化に関する2, 3の問題について—福祉心理学の視点から,

VandenBos, G. R., 2007, APA Dictionary of Psychology, APA (ファンデンボス, G.R. (監修), 繁榊算男・四本裕子 (監訳), APA心理学大辞典, 培風館, 2013)

矢澤圭介, 2000, 福祉心理学の方法的態度, 人間の福祉, 8巻, pp.1-15

